

令和4年度全国水産試験場長会全国大会（富山）

要 録



期 日：令和4年11月16日（水）

会 場：ポルファート富山

富山県富山市奥田新町8-1

主 催：全国水産試験場長会

目 次

1	大会の構成	
(1)	大会日程	1
(2)	大会次第	2
(3)	出席者名簿	3
2	挨拶	
(1)	会長	5
(2)	来賓	7
(3)	開催県	13
3	報告	
(1)	令和3年度の活動結果と令和4年度の活動計画について	14
(2)	国への要望「地域の抱える懸案事項」等について	15
4	情報交換	
	・ 岩手県水産技術センターの震災からの復旧状況	56
5	話題提供	
	・ 富山県における水産業と研究業務について	60
6	優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰	
(1)	審査委員長経過報告・講評	63
(2)	副賞贈呈・コメント	67
(3)	会長賞受賞記念講演	
	① 茨城県	69
	② 山口県	75
	③ 青森県	80
7	その他	85
8	次年度開催県	87
9	現地意見交換会	88
10	関係写真	89

1 大会の構成

(1) 大会日程

大会行事	開催日時・開催場所
全国大会	令和4年11月16日 13:30~17:00 ポルファート富山
現地意見交換会	令和4年11月17日 9:40~11:20 富山県農林水産総合技術センター水産研究所

(2) 大会次第

令和4年度全国水産試験場長会全国大会（富山県）

次 第

開催日時 令和4年11月16日（水）13：30～17：00

開催場所 ボルファート富山

1 開 会

2 挨拶

(1) 会 長

(2) 来 賓

(3) 開催県

3 報 告

(1) 令和3年度活動結果および令和4年度活動計画について

(2) 国への要望「地域の抱える懸案事項」等について

4 情報交換

・岩手県水産技術センターの震災からの復旧状況

5 話題提供

・富山県における水産業と研究業務について

<休憩>

6 優秀研究業績全国水産試験場長会会長賞表彰式

(1) 審査委員長経過報告・講評

(2) 会長賞表彰式

・会長賞表彰

・副賞贈呈（地域水産試験研究等促進奨励会）

(3) 会長賞受賞記念講演

①「北部太平洋海区のさば類の資源・漁況予測の精度向上に関する研究」

茨城県水産試験場（現：茨城県農林水産部水産振興課）

主任 多賀 真

②「二枚貝養殖方法の特許技術を活用したタイラギ中間育成技術開発」

山口県水産研究センター 内海研究部 増殖病理グループ

専門研究員 多賀 茂

③「カワウ食性解析へのDNAメタバーコーディング法の活用による食害対策」

青森県産業技術センター内水面研究所 調査研究部

主任研究員 静 一徳

7 その他

8 閉 会

(3) 出席者名簿

○来賓			
	機 関 名	役職名	氏 名
国 等 関 係 機 関	水産庁 増殖推進部	部長	廣 野 淳
	水産庁 増殖推進部 研究指導課	企画調整係員	久保田 莉央
	水産研究・教育機構	理事長	中山 一郎
	水産研究・教育機構	理事長補佐役 (経営企画部次長)	桑 原 隆 治
	(公社) 日本水産学会	会長	東 海 正
	地域水産試験研究等促進奨励会		
	(一社) 全国水産技術協会	会長	川 口 恭 一
	富山県農林水産総合技術センター	所長	大 島 晃
○海面			
北海道	(地独) 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場	本部長兼場長	木 村 稔
	(地独) 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場	副場長	中 多 章 文
東 北	(地独) 青森県産業技術センター水産総合研究所	所長	長 崎 勝 康
	岩手県水産技術センター	所長	神 康 俊
	岩手県水産技術センター	首席専門研究員兼企画指導部長	大 友 俊 武
	福島県水産海洋研究センター	所長	水 野 拓 治
	茨城県水産試験場	場長	富 永 敦
	茨城県農林水産部水産振興課	主任	多 賀 真
北部 日本海	秋田県水産振興センター	所長	水 谷 寿
	山形県水産研究所	所長	阿 部 信 彦
	新潟県水産海洋研究所	所長	河 村 智 志
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	所長	田 子 泰 彦
	石川県水産総合センター	所長	福 嶋 稔
東 海	千葉県水産総合研究センター	センター長	大 和 義 久
	東京都島しょ農林水産総合センター	所長	中 野 卓
	神奈川県水産技術センター	所長	滝 口 直 之
	静岡県水産・海洋技術研究所	所長	萩 原 快 次
	愛知県水産試験場	場長	蒲 原 聡
	愛知県水産試験場	主任研究員	和 久 光 靖
	三重県水産研究所	所長	藤 田 弘 一
	三重県水産研究所	主査研究員	阿 部 文 彦
	和歌山県水産試験場	場長	奥 山 芳 生
瀬戸 内海	(地独) 大阪府立環境農林水産総合研究所水産研究部	水産研究部長	佐 野 雅 基
	兵庫県立農林水産技術総合センター水産技術センター	所長	平 石 靖 人
	兵庫県立農林水産技術総合センター水産技術センター	主席研究員兼課長	宮 原 一 隆
	岡山県農林水産総合センター水産研究所	所長	草 加 耕 司
	広島県立総合技術研究所水産海洋技術センター	次長兼技術支援部長	柳 川 建
	山口県水産研究センター内海研究部	部長	高 田 茂 弘
	山口県水産研究センター内海研究部	専門研究員	多 賀 茂
	香川県水産試験場	場長	向 井 龍 男
	愛媛県農林水産研究所水産研究センター 栽培資源研究所	所長	加 藤 利 弘
	高知県水産試験場	場長	岩 崎 健 吾
西部 日本海	福井県水産試験場	海洋研究部長	河 野 展 久
	京都府農林水産技術センター海洋センター	所長	井 谷 匡 志
	鳥取県水産試験場	場長	石 原 幸 雄
	島根県水産技術センター漁業生産部利用化学科	科長	開 内 洋
	山口県水産研究センター	所長	中 村 圭 吾

九州・山口	福岡県水産海洋技術センター	所長	濱田 弘之
	福岡県水産海洋技術センター有明海研究所	所長	林 宗徳
	佐賀県玄海水産振興センター	副所長	廣田 健一郎
	長崎県総合水産試験場	次長兼企画開発推進室長	本田 敦司
	熊本県水産研究センター	次長	山下 幸寿
	大分県農林水産研究指導センター水産研究部	部長	伊藤 龍星
	大分県農林水産研究指導センター水産研究部北部水産グループ	グループ長	木村 聡一郎
	宮崎県水産試験場	場長	西府 稔也
	宮崎県水産試験場	副場長	安田 広志
	鹿児島県水産技術開発センター	所長	西野 博
	沖縄県水産海洋技術センター	所長	七條 裕蔵
○内水面			
東北・北海道	(地独) 青森県産業技術センター内水面研究所	所長	吉田 達
	(地独) 青森県産業技術センター内水面研究所	主任研究員	静 一徳
	福島県内水面水産試験場	場長	川田 暁
関東・甲信越	栃木県水産試験場	場長	尾田 紀夫
	群馬県水産試験場	場長	小西 浩司
	埼玉県水産研究所	所長	青木 伯生
	新潟県内水面水産試験場	場長	樋口 正仁
	山梨県水産技術センター	所長	近藤 隆
	長野県水産試験場	場長	小川 滋
東海・北陸	岐阜県水産研究所	所長	石垣 要吾
西日本	滋賀県水産試験場	場長	西森 克浩
	滋賀県水産試験場	次長	井出 充彦
	福岡県水産海洋技術センター内水面研究所	次長	宮内 正幸
○開催県			
事務局	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	副所長・海洋資源課長	前田 経雄
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	栽培・深層水課長	村木 誠一
	富山県農林水産総合技術センター水産研究所	内水面課長	南條 暢聡

2 挨拶

(1) 会長

全国水産試験場長会長

(兵庫県立農林水産技術総合センター水産技術センター所長) 平石 靖人

皆さま、こんにちは、4月から会長を務めています兵庫県水産技術センターの平石でございます。本日は、よろしく願いいたします。

新型コロナの感染者数も、なかなか先が読めない状況となっています。昨年、この大会がWEB開催となり、残念だと言う声も聞いていました。会の目的のひとつである「会員間の情報交換」に思いを馳せますと、本日このように開催することができ、会員の皆様には、多数ご参加いただきました。本当にありがとうございます。

また公務ご多忙のところ、水産庁増殖推進部長の廣野様をはじめ、水産研究・教育機構理事長の中山様、日本水産学会会長の東海様、地域水産試験研究促進奨励会代表の川口様、そして富山県農林水産総合技術センター所長の大島様など、来賓の皆様にも多数ご出席いただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

3日前、13日(日)に全国豊かな海づくり大会兵庫大会が本県明石で開催されました。終了後には天皇皇后両陛下に本県水産技術センターをご視察していただき、全て無事に終了いたしました。兵庫らしい栄養塩の大切さも発信できたと考えています。大会には水産庁から廣野増殖推進部長にも参加していただき、ありがとうございました。

我々全国水産試験場長会は、昭和30年の発足以来、67年に及ぶ活動の歴史があります。平成23年から行っている全国大会では、水産業の発展に寄与すると認められる業績を、優秀研究業績として表彰しておりますが、今大会においても三つの業績について、表彰及び受賞の記念講演を行うこととしております。また、受賞者には、地域水産試験研究促進奨励会から豪華な副賞をご提供いただいております。モチベーションアップは計り知れないものがございます。奨励会の川口様には、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

さて、昨今の水産業を取り巻く情勢は、地球温暖化をはじめとする環境変化や、ALPS処理水海洋放出など東日本大震災と原発事故に起因する課題、さらには内水面や全国に蔓延する疾病対策など、これまでも増して非常に厳しい課題に直面しております。

また、改正漁業法により、国・都道府県が連携して資源調査や資源評価がなされても漁業者が納得して実行できなければ生産量の回復は困難で、たとえば遊漁の実態把握とその管理体制等を求められるなど、漁業の現場も大きく変化しております。

場長会では会員が密接に連携し、これら諸問題に対して調査・研究に努めているところですが、これらの中には国の行政や研究機関のご協力がなければ解決が困難な課題があることから、水産庁や水研機構に対して、様々な要望をしてきております。今後も、こ

れまで以上に国、水産機構、われわれ地方水試が一体となって課題解決を図っていく必要があると考えております。

このことに関連してご報告がございます。東京海洋大学の東海先生が日本水産学会の会長に5月に就任され、現場重視の観点から地方の水産試験場の場長に理事に入ってもらいたいという意向で愛知県の蒲原場長が理事として正式には来年5月の総会で承認されると聞いています。東海会長とは、学会支部と地方水試との交流の活発化や現場ニーズの要望等の把握などを通して、全国水産試験場長会と日本水産学会との連携を深めることを確認しており、我々にとって大きなメリットであり、大変ありがたいと思っています。東海会長には本日の出席についてお願いしたところ、お忙しいところ快く出席していただき、心から感謝申し上げます。

本日の全国大会は、会員相互、関係機関との連携を図るために行われる、年に1度の貴重な機会です。有意義な大会となりますよう、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、コロナ禍で先の状況が見通せない中、早い段階から本大会の開催実現のために、多大なご尽力をいただきました、富山県水産研究所の田子所長様をはじめとする皆様ほか、関係の皆様方に、心から御礼を申し上げまして、開会の挨拶とさせていただきます。

本日は、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(2) 来賓

水産庁増殖推進部長 廣野 淳

ご紹介いただきました水産庁増殖推進部長の廣野です。

今日は、場長会の全国大会ということで、私の方から、どんなことを考えているのかを少し話したいと思います。誰の言葉かは忘れたのですが、「物事が起きたときに、それが一時的なものであれば「対応」すれば良いけれども、それが今後も続くものであれば「適応」していかなければいけない」という言葉があります。我々は、まさに今、そういう状況にあると思っています。

大きく二つあると思っていまして、一つは人です。昨日だか一昨日だったか、世界人口が80億を超えたというニュースがありました。一方で、我が国は少子高齢化がどんどん進んでいるということで、人口統計を将来にわたってコホート解析で分析しているデータがあるのです。コホート解析というものはもともと医学での話らしく、病気とか体質とか食べ物とかをずっとやっていくとどうなるのかを調べるための方法論だそうで、それを、水産で資源管理に使っているということですが、都道府県だけでなく市町村別に将来の年齢別の人口推計が出ています。それに漁業センサスの市町村別の漁業従事者の人口があるので、それをくっつけて将来どうなるか30年後を計算してみたところ、日本の人口は今の6割ぐらいで、4割ぐらい減るのですが、漁業就業者は、都道府県によっては3割ぐらいになってしまいます。本当に3分の1になるって話です。そういうことが今後起きていく、我が国の漁業で働く人がどんどん減っていくというのは、起きるのだと、これは予想でもなんでもなくて、事実です。ですから、これには「適応」していかなければいけないということだと思っています。

もう一つは、今、COP やっていますけれども、温暖化温暖化って言っていますが、我々、漁業に携わっているものがずっと見てきてですね、単なる直線上の温暖化ではないっていうのは、皆さん感じていらっしゃると思います。単に100年で何度上がるとかというだけではなくて、気温のトレンドが上がっていく中で、これまでの定常的な気候の循環、何十年周期みたいなのが全く壊れて、これまで見たことも聞いたことも経験したこともないような気候状況が現れる。あるところではものすごく水温が上がるかもしれないし、ひょっとすると下がる場所もあるということもありまして、台風が激しくなったり、雨が降ったり降らなかったり、赤潮が出たり出なかったりと、これまで起きていたことが全く予想つかないようなことが起きてくるのではないかと。そうすると、魚は鰭があるので泳げるじゃないかって、よくマスコミの人にも言われるのですが、魚は魚だけで生きている訳ではなくて、その餌生物や海藻類を含めて生態系そのものの中で生きていますので、周りの環境に激しい変化が起きて、予想もつかないような影響を受けるものが出て

くるということになっていくのだと思います。海藻なんかはまさにそうで、歩いていけないものですから、磯焼けが生じていて、クロダイやニザダイが食べてしまうのが原因といった話もありますが、生態系全体が変わってきていることが根本の原因で、そういうことがどんどん起きてしまっているということです。この地球温暖化とか気候の変化に対して、我々人類がそのこと自体を止めることは非常に困難なので、これもやっぱり「適応」していかなければいけないのだと思っています。

皆さんは行政よりも研究の経験が長いとすると、先日の漁業法改正の話をどれぐらいご存知か分かりませんが、我々水産庁としては、今申し上げたような「適応」をしていかなければいけないという中で、資源管理とか成長産業化を言ったわけです。魚が減っているから、これを大事にして増やさなければいけないし、成長産業化っていうのは、逆に言うと人が減るのだから漁業の効率は上げていかなければいけない。それは養殖も同じで、そういうことがコアにあって、やってきました。だから、法律改正をやっている中で、沿岸の弱小の漁業者はいなくなってもいいのかみたいな話がありましたが、そうではないのですね。今後の我が国をめぐる状況を考えたときに、ここは必ず「適応」していかなければいけないと思っています。

実感されている方もいらっしゃると思いますが、今申し上げたような気候変動に対応してどういう漁業にしていくか、気候変動の状況がどうなっているのか、それを見据えて、漁業生産や養殖をどうしていくのか、という問いに対して、水産研究機関にもものすごい期待が寄せられています。逆に言うと、我々水産研究機関は、これに応えなければいけないということです。今の若い人たちが、20年、30年後もちゃんと日本の魚が食べられる、日本の漁業がしっかり続いていくことができるように、皆さんに本当に期待したいと思っています。そういう意味で今日の会議を楽しみにしています。

最後になりますが、本日、富山県をはじめ、この会議を準備された方に感謝申し上げますとともに、参加の皆様のご健勝をお祈りして私の挨拶とします。ありがとうございました。

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 理事長 中山 一郎

皆様こんにちは。水産研究・教育機構の中山です。よろしくお願いいたします。

全国水産試験場長会全国大会が久しぶりに対面で開催されますこと、お慶び申し上げます。

また日頃より水産研究・教育機構の研究活動の推進にあたって、ご協力に心より感謝しております。ありがとうございます。

我々の機構は本年 125 周年を迎えました。世界を見渡してみても、125 年間、水産だけに特化して研究を行ってきた機関、これだけの規模の機関はなかなかなく、誇りを持っておりますが、片や日本の水産の状況を見れば、本当に今大変な時期になっている、ということを感じています。

最近ちょっとコロナが収まりましたので、海外出張ができるようになり、久しぶりに東南アジア（タイ・シンガポール）とフランスに行ってきました。これらの国では、実は現在すごく水産の元気がよく、色々な所に行っても水産物が溢れていますし、市場に行っても生の魚があります。寿司コーナーも世界中に広がっていますし、世界全体を見ると、水産業というのは、今、本当に勢いを持っているなという印象を強く抱きました。フランスは水産国でないと思われていますが、市場ではデジタル化が非常に進み、遠隔から入札ができるシステムにより国境を越えた入札もあり、フランスに揚がった魚がスペインやイタリアに出荷されていくという状況を初めて目にして驚きました。やはりこれは日本もしっかりと水産復活、復興していかなければならないという思いを強くしたところです。

そういう中で、やはり研究開発、イノベーション、科学の力というのは、ベースとして一番大事な時期に入っていると考えています。例えば、新しい技術によって新しいことがわかってくる、ということがいろいろと起きています。海の環境においても、今までプランクトンというのはプランクトンネットで曳いたものしか調べられませんでした。環境DNAを使うと、網を通り抜けるような小さなプランクトンまでわかってくる訳です。そういうものを調べていくと、実は海のポテンシャルというのはとんでもないものがある、バイオマスからしても、実はネットに掛かるよりも通り抜けている部分（バクテリア含む）が遥かに多いのではないか、ということが少しずつわかっています。ブルーカーボンについても、思ったよりも海洋はポテンシャルが高いのではないか、というようなことがわかりつつあります。そういう中で、水産業というものを、今の既存の水産業だけではなく、その運用も含めて海洋全体を産業として盛り上げるための研究開発というのはすごく大事になっているのではないかと思います。

我々の機構の組織再編（令和2年度）の関係で、機構主催のブロック別推進会議は今年から廃止となりました。これに代わって、各ブロックの場長会に呼んでいただき、そして今日は全国大会にも呼んでいただいているような状況で、場長の方々とどうやってコミュニケーションをとっていくかを今真剣に考えているところです。しかし水産業は、中央でやっていけばいいという話ではなくて、やはり現場が一番大事ですので、そういう意味では地域との連携にしっかりと力を入れていきたいと思っています。いろいろな専門分野における連携に関しては、今まで通り全国対応の会議として分野別推進会議を開催いたしますので、ご参加をお願いしたいと思います。また全国水産業関係研究開発推進会議を2月16日に1日をかけて開催する予定にしておりますので、ぜひご参加をいただきたいと思っています。幹事県の方々は今まで通り対面で参加していただきますが、幹事県でない方々もウェブで参加できるような形にしたいと思います。この全国推進会議をしっかりとやっていきたいと思っていますので、ご協力をお願いします。

イノベーションに繋がるような研究開発、試験研究というのは、本当に大事なものだと思っており、その中で今日のような、この重要な場長の集まりというのは、本当に楽しみにしていたところでございます。

最後になりますが、この会議を運営していただいている富山県の方々、それから、それを支えていただいているの方々に対して、御礼申し上げるとともに、皆様のご健勝をお祈りしまして私の挨拶といたします。ありがとうございます。

公益社団法人日本水産学会 会長 東海 正

ご紹介いただきました、日本水産学会長の東海です。

この度、令和4年度全国水産試験場長会全国会議を対面で開催できること、お喜び申し上げます。また本日、このようなお話をさせていただく時間をいただきまして、平石会長をはじめ場長会、会議をご準備されました富山県の皆様方に、厚く御礼申し上げます。

日本水産学会は、1932年の創立で今年90周年になります。その歴史の中で、公益社団法人として公益性を高めて管理運営していくことが求められております。日本水産学会の正会員で現在2500名ぐらいいるうち、名簿で見るとは限りますが、水産試験場や県庁にお勤めの方が、485名ほど、正会員全体の19%弱いらっしゃいます。先ほど廣野部長から「試験研究に期待をしている、これが基礎である」というお話をいただきました。私もやはり日本がこれからも伸びていくためには科学技術が大いに必要だろうと考えております。

私は本年5月に会長となり、会長として何に取り組むべきか考えました。私はもともと水産研究所、現在の瀬戸内水研、当時南西水研で研究をしており、国際的な漁業や沖合漁業がない研究所でもあり、調査研究しようと思うとどこかの府県の方々の海に入り、一緒に行く必要がありました。小型底曳網の投棄魚や網目の拡大と資源管理の研究を行い、またその後大学に移りましても混獲防止やアナゴ漁業資源研究会などを通じて都道府県の方々と一緒に仕事をすることが多く、沿岸の現場の話が比較的好く聞こえる中で研究してきたという経験があります。一方、大学の先生たちはいま国際的な競争、具体的には英語でインパクトファクターの高い国際的な雑誌で論文を公表することが求められています。それだけで「本当に試験研究として役に立つのか」と言われるとなかなか辛いところがあります。では、研究を応用に繋げるとは一体どういうことだろうと原点に戻って考えてみると、やはり現場ではないかと思っています。そうすると、より現場でご苦労をいただいている都道府県の方々と一緒に研究ができる場を設けていくことが、いまの大学の教員には必要なのではないかと考えて、そういった思いを平石会長はじめ、何人かの場長、場長経験者の方々にご相談をさせていただきました。水産学会長として会長指名で水産学会の理事にぜひ全国水産試験場長会からおひとり入っていただきたいと希望を伝えました。さきほども紹介がありましたが、愛知水試の蒲原場長に理事に入ってください、それによってより多くの研究者を縦横につないでいくことを考えております。今回も、この会議にお誘いいただき、良い機会だと考えて参加させていただきました。是非とも、連携をどのようにしていけば良いか、忌憚のないご意見等を様々な形でいただきたいところです。

また、日本水産学会誌には「水産研究のフロント」という記事があります。その中で、平石会長にお願いをして、来年の1月号掲載として、この全国水産試験場長会の紹介記事を書いていただきました。原稿の執筆をありがとうございました。その記事を最初として、各県の公設試験研究機関を順に紹介する記事を書いていただき、現場でいま取り組まれていることなどをご紹介していただきたいと考えております。そのような取り組みを通じて、多くの研究者との繋がりができるきっかけになればと思います。また、学生で試験研究機関への就職を目指すものにとっては、やはり水産試験場が一つの大きな就職先として考えられています。もちろん皆様方のところで用意されたパンフレットもありますが、日本水産学会誌の記事で学生たちに見てもらうことも良いかと思います。日本水産学会との連携については、場長会と学会の理事会との繋がりでなく、それぞれの学会の支部でも多くの都道府県の方々と地方の大学の研究者がよりうまく連携して、試験研究を展開していけたらと希望しております。

さて、話は日本水産学会からは離れますが、農林水産技術会議の方では若手農林水産研究者表彰を設けて、公設試験研究機関の若手（40歳未満）試験研究者も含めて表彰を行っており、以前に私はその審査員をやっておりました。非常に残念なことに、水産分野での表彰者はあまり出ていません。もちろん大学の若い研究者も受賞しておりますが、畜産や農業工学、農芸化学、園芸分野では、府県の研究者が受賞しています。本日は全国の水産試験場長の皆様がお集まりですので、若い研究者による良い研究があれば、ぜひ推薦していただき、農林水産技術会議に対しても水産分野が頑張っているところを見せられたらと考えております。

少し長くなりましたが、本日この会議でもって皆様方の研究並びに活動がますます活発になることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございます。

(3) 開催県

富山県農林水産総合技術センター 所長 大島 晃

令和4年度全国水産試験場長会全国大会の開催にあたりまして、開催県を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

本日はご来賓の皆様をはじめ全国の水産試験場長の皆様、富山県へようこそお越しくございました。心から歓迎申し上げますとともに、富山県でこの大会を開催できましたことに厚く御礼申し上げます。

ご承知の方もおられるかもしれませんが、この富山県は海岸線延長約100キロメートルと非常にコンパクトな県でございますが、標高3000メートル級の立山連峰から、水深1000メートルを超える富山湾に至るまで、高低差4千メートルのダイナミックな地形を成しております。富山湾は、駿河湾、相模湾と並ぶ、全国有数の深い湾で、県内では天然のいけすとも呼ばれております。そして冷水性と暖水性の魚種が多様な生物相を形成しているところでございます。漁業の主体は、定置網でございます。アジ・サバ・イワシ類やスルメイカをはじめ、富山県を代表するブリやホタルイカが漁獲されているところであります。こうした中、近年、漁獲量につきましては、非常に変動が見られまして、特に今年はホタルイカの漁獲量が2101トンと平年比155%の豊漁でございました。また、シイラの漁獲量が増えてまいりまして、昨年は過去最高となるなど、漁獲される魚種の変化も見られ、今後は環境変化にも対応した試験研究が求められています。

本県ではこうした状況も踏まえまして、栽培漁業の技術開発にも力を入れており、キジハタ・アカムツの種苗生産技術は、確立されつつあるところです。また県の栽培漁業センターでは、クロダイ種苗の増産施設、それから教育、産業観光向けの学習体験施設の充実整備を進めているところで、去る10月22日に竣工式を終えたところです。そして、栽培漁業の理解促進、或いは研究成果の普及啓発に一層力を入れているところです。

数多くの種類の水産資源が、県境を越えて、海や川を広範囲に分布・回遊しております。国や中央の関係機関と地方の試験研究機関が、より密接に連携し合いながら一体となって、課題解決に当たり、情報共有することが極めて重要と考えております。こうした点からも本日は活発な議論が展開されまして、実り多き大会となりますことを祈念いたしまして、開催県の挨拶とさせていただきます。今日、また明日と、どうぞよろしく願いいたします。